

画期的な資料集成

——『福生市史資料編』近代・新聞資料（昭和）偶感——

桜 沢 一 昭

魅力ある『福生市史』誕生にむけて、市史編さん開始当初、わたくしは、福生近・現代史への充実を提唱したことがあった。

地域の近・現代史というと、あの絢爛たる自由民権運動の時代ばかりが脚光を浴び、とかく地味な産業経済史的な側面は軽視されがちとなる。たとえ、戦中・戦後史が語られていても、せいぜい年表的な事象の羅列か、行政資料の紹介程度におわってしまう。昭和四九年六月に刊行されたわが『羽村町史』も、その例外ではない。ために、町史から一〇年後の昭和五九年に編さんされた『羽村町農業協同組合史』では、その反省の意味をこめ、農協自体の変遷を叙述すると同時に、『青年会報』などの史料を駆使し、とくに、戦前・戦後の産業経済の動向に着目し、町史の補完につとめた。

そうした観点に立つならば、魅力ある『福生市史』の成否とは、横田基地に象徴される基地以前・基地以後の歩み、つまり、福生近・現代史がいかなるかたちで市史に盛り込まれているかにつきるといっても、けっして過言ではあるまい。

そんなわたくしの期待と願望に応えてくれるみごとな資料集が刊行された。『福生市史資料編 近代・新聞資料（昭和）』である。

本書巻末の解説「新聞記事から迫った昭和世相史」（新井勝紘）に指摘されるように、昭和三五年に刊行された『福生町誌』には、なぜか「近代」という章がすっぽりと欠落している。「横田基地」という動かしがたい歴史的存在から逃がれたら、その核をはずすことになってしまう」

「近現代史を貫徹するような問題が、戦争・基地・地域

民衆」というキーワードにこめられていよう。これを少しでも解いていかないと、福生の近現代史は、骨のない地域史になってしまふ。そうした問題意識から、本資料集が編まれたという。

本書は、府中市立中央図書館所蔵の『読売新聞』を中心に、昭和二年のみ、昭島市民図書館所蔵の『東京日日新聞』で補足しつつ、昭和二（一九二七）年から同二一（一九四六）年まで、日中・太平洋戦争をはさむほぼ二〇年間の新聞記事のなかから、福生および西多摩地方の主要記事を年代順に集成、配列したものである。

こころみに、福生町が誕生した昭和一五（一九四〇）年の項目を抽出してみよう。まず、福生関連では、

戦没遺族懇談会 養豚兎組合助成金 府立十九中建設
敷地 東方会福生分会 西郡永勤教員表彰 組合村の
紛争（一・二・三） 誠明学園脱走 組合村紛糾調
停 水不足 慰問袋が縁で葬儀へ 区画整地測量 人
命救助 工事場の決闘未遂 憲兵福生分遣隊新設 新
村合併原案 村長決る 熊川村の火事 福生村・熊川
村の合併決る 新町名称きまる 生まれる福生町 紀
元二千六百年奉祝行事 町制祝賀会 町制祝賀絵巻
町議会選挙 関東学生駅伝
ついで、西多摩関係の記事。

教員会で武運長久祈願 中等学校入学の新考査総評

檜原村の製炭景気 女ばかりの勤労班西郡で誕生 米
国へ百合根輸出 小作農四割減に食糧増産の悩み 増
産総力戦に学童も野良へ 西郡の徴兵検査成績 三多
摩壮士小島翁の今昔談 西郡政友倶楽部近く解散式
部落毎に農事実行組合組織 部落新体制へ西郡の発足
青少年の体力検査実施 軍道紙活況

項目を列記するだけでも、福生・西多摩地方における昭和一五年という時代の輪郭、雰囲気がおおよそかがい知れよう。ちなみに、昭和一五年といえは、どのような時期なのか。政治・経済面では、近衛文麿、新体制運動推進の決意表明（六月）、大東亜新秩序・高度国防国家建設方針を軸とする「基本国策要綱」の閣議決定（七月）、日本軍、北部仏印進駐（九月）、日独伊三国同盟調印（同）、大政翼賛会発足（一〇月）、大日本産業報国会創立（十一月）、社会・文化面では、津田左右吉、早大教授辞任、いわゆる『神代史の研究』発禁事件（一月）、生活綴方関係教員の検挙（二月）、東京市内に「贅沢品は敵だ！」の立看板（八月）、砂糖・マッチ切符制全国実施（十一月）、紀元二六〇〇年祝賀行事（同）、などがあつた年である。

本書でも、福生・西多摩の新聞記事の前に、その年度を象徴する事件や世相の二、三点が、かならず紹介されている。昭和一五年では、「日独伊三国同盟締結」「紀元二千六百年祭」「八紘一字」の三項目がみえる。この略年表と福

生・西多摩の主要新聞記事とを対比比較することにより、それぞれの時代状況を鮮烈に浮彫りさせる工夫がほどこさされている。このあたりにも、編者の周到な配慮がほのみえるようだ。

ここでは、たまたま昭和一五年の事例を引いてみたが、単年度にかぎらず、連綿たるひとつの時代の潮流を背景に、福生・西多摩の村政状況、産業経済、世相、教育、文化が俯瞰される。しかも、読む側にとっては、ことさらにふかい問題意識をもちあわせずとも、興味本位に拾い読みしても、それなりにおもしろい。

が、総合的にみると、やはり、戦争へ収斂、集約されていく地域の動向というのが、本書の最大の特徴であろう。本書全篇を通覧するに、戦争への傾斜を、解説者新井氏の言葉に置きかえるならば、「戦争協力に向って国家総動員体制へ持っていく国策があり、同時にそれにのっていかないと地域の発展も望めないという社会的状況がある」。

しかも、年を追うごとに、地域民衆は、「戦争と民衆」という構図に戦争協力にむかい、いつしか、「戦争と民衆」という構図が「民衆と戦争」に転位してしまう。「新聞記事の背景にある国家の意図と民衆の意識をあぶり出すことが、今後の課題」と新井氏は提起されているが、まさしく、地域昭和史を正面から描出するためには、たんに事実、事象の羅列にとどまらず、国家権力装置の意図と地域民衆意識の相

関関係をきびしく見直す段階にきているというべきであろう。『福生市史』近代編の章では、そこまで高次の、克明な分析が期待されている。地域の産業経済、文化、教育、世相の変遷もまた、そうした視座から考察する必要がある。

本資料集の活用事例として、時期はやや前後するが、本資料集を一貫して探索された内田祥子氏の労作「新聞記事にみる福生昭和史の一断面」(『みずくらいど』第四号 昭和六二年三月)に注目しておきたい。

内田氏は、昭和一〇(一九三五)年から敗戦をはさむ昭和三〇(一九五五)年までの二〇年間の新聞記事を読説し、つぎの三つの視点から分析された。

- ① 生産の場としての多摩 当時の多摩は東京市の「都」に対して「鄙」の立場であったこと。つまり帝都に対する地方、消費地に対して生産の場であったこと
- ② 軍都として飛躍していく多摩 国の中枢機関の集中する東京市から最も近い地方として期待され、担っていく多摩の姿

③ 多摩の女性たち 彼女たちはどのように戦争に参加させられていったのか、戦後の女性達は？

いずれも、「多摩」とあるが、むろん、福生を中心とする「多摩」である。それぞれにみごとな福生昭和史の断面が語られているが、とりわけ、時代の世相、風俗をまじえ

て活写された第三章の女性史は、女性ならではのきめこまやかな感性和筆致に満ち、圧巻である。「多摩の女性達」戦前・戦後の章は、このまま再録しても、あるいは、『福生市史』の白眉となるような予感さえ感じさせる。

論文末尾で、内田氏は、「多摩地方なら当然取上げるべきと思われる養蚕および織物業とそれに従事する女性達の事、各地で起きていた小作争議の件、多摩川流域に生活する人々の様子など全く触れなかった」と自戒しつつも、なお「これからも新聞資料の検索を続けてゆきたい」と決意のほどを表されているが、先述の新井氏の「課題」とあわせ、本書に内包されている研究命題は無尽蔵である。

本書未収録の欠号もあり、頁数の関係上、西多摩関係の記事は、ことごとく網羅されたわけでもない。大半は、『読売新聞』に依るが、さらに『朝日新聞』や『東京日日新聞』などの補捉作業ものこる。また、可能ならば、この前後の記事集成も必要となるかもしれない。

そういったいくつかの宿題をのこしつつも、地域版の新聞記事集成という壮挙は、他の市町村史編さん事業のなかでも、寡聞にして知らない。まさに画期的な新開拓と高く評価したい。また、隣町に住み、いささか歴史学を志さず若輩のわたくしなどにとっても、福生とあわせ西多摩地方の主要記事を採録された市当局の見識、雅量をありがたくおもう。

「いずれにしても、新しい一つの試みとして、他ではできなかった資料集を刊行できたことは、今後の市町村史、あるいは地域史の近現代史へのアプローチの方法を、提示できたのではないだろうか」という新井勝紘氏の感慨は、けっして文飾でも誇張でもない真実の弁とうけとめている。贅言ながら、より魅力ある『福生市史』誕生のために、あえて柳田国男のつぎの言葉を贈りたい。むろん、本書に難癖をつける気持など、さらさない。

「自分が新聞の有り余るほどの毎日の記事を、最も有望の採集地と認めたことは、決して新聞人の偏頗心からでは無かった。新聞の記録ほど時世を映出するといふ唯一の目的に、純にして又精確なものは古今共に無い。さうして其事實は、数十万人の、一斉に知り且つ興味をもつものであったのである。ちゃうど一つのプレパラートをも一つの鏡から、一時に覗くやうな共同の認識が得られる。是を基礎にすることが出来れば、結論は求めずとも得られると思った。其為に約一年の間、全国各府県の新聞に眼を通して、莫大の切抜を造っただけで無く、更に参考として過去六十年の、各地各時期の新聞をも渉獵して見たのである」

「ところが最後になって追々と判って来たことは、是だけ繁多に過ぎたる日々の記事ではあるが、現実の社会事相は是よりも亦遙かに複雑であって、新聞は僅にその一

部をしか覆うて居ないといふことである。記録があれば最も有力であるべき若干の事実が、偶然に此中から脱して居るといふことであった」(『明治大正史』世相篇 自序)

文献史料にたよらず、「現代生活の横断面、即ち毎日我々の眼前に出ては消える事実のみに拠って、立派に歴史は書ける」という柳田史学の方法論が「福生昭和史」執筆にどれほどの有効性をもつのか、わたくしは知らない。むしろ、柳田史学は、あくまで柳田国男という一天才、一碩学の、しかも一代かぎりのものであって、その援用は、至難の業というべきであろう。しかし、この柳田の実感史学、感覚史学の手法も捨てがたい。柳田もまた、一度は、過去六〇年の新聞を「涉獵」したではないか。ならば、福生近・現代史執筆にあたり、心のかたすみこに、この柳田の「遂げざりし野望」をとどめながら、もう一度、本資料集を検証するならば、かならずや、われらが待望してやまぬ至高の『福生市史』が生まれるにちがいない、と確信するのである。

(さくらざわ・かずあき 羽村町文化財保護審議委員)